



大好き！絵本

初瀬 恵美



『クジラがしんだら』
文：江口 理絵
絵：かわさきしゅんいち
監修：藤原 義弘
出版社：童心社

今年は昨年生まれた「地球沸騰化」という言葉をより実感した夏でした。終わりがみえないかのような酷暑が続きましたが、ようやく朝晩は秋の気配が感じられるようになりましたね。

さて、今季は私が一度手に取ったらとってもお気に入りになってしまった『クジラがしんだら』という絵本を紹介したいと思います。

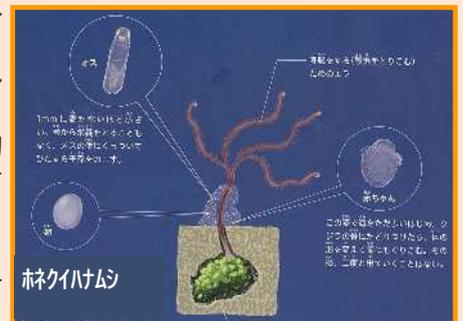
みなさんは、「クジラが死んだらどうなるかな？」と考えたことはありますか？私は一度もありませんでした。まず、死骸はプカプカ浮かぶと思いますか？それとも沈んでいくと思いますか？そう尋ねられたら私は迷わずに「浮かぶと思います」と答えると思います。なぜなら、海で死んだ魚が浮かんでいるのを見たことがあるからです。しかし、正解は「沈む」でした。(まさしく 表紙の通り！) 深く暗い海の底にクジラが沈みゆき、深海の世界にスポットがあてられて話が始まります。

深海では、クジラが死んで沈みゆくと、その匂いに気がついて、まず**コメザメ**がやってきました。なんと半年も何も食べていませんでした。ですからするどい歯で、クジラの厚い皮膚をガツガツ、ムシャムシャ食べました。それを、遠巻きに見ていたのが**コンゴウアナゴたち**。サメが大きな穴を開けてくれたので食べやすくなり、お腹いっぱい食べることができました。それから肉の匂いに惹きつけられて、**タカアシガニ**や**ウニ**、**ダイオウグソクムシ**など、深海の生物たちが次々にやってきました。**ダイオウグソクムシ**は、「何年も、なにも 食べていなかったのでもう ペコペコです」とさらりと書いてあります(笑) 思わず「ダイオウグソクムシって、何年も食べなくても生きてられるんだ、すごい！それでいったい何年生きるんだろう？」と考えてしまいました。

この絵本は、このようにさらりと書いてある豆知識が沢山あります。さらに絵本の最後には、収まりきらなかった、話もあり、これがマニアックですがおもしろく、1回でお気に入りになったPointでした。

さて、はらぺこだった**ダイオウグソクムシ**は、みんなの食べかすもきれいに食べて片付けたので、クジラは骨だけになりました。

これで、この絵本は終わりかと思いきや・・・なんと、骨を食べる生き物がいたのです！ その名も**ホネクイハナムシ**。ちょっと不気味な名前ですね。説明文によると、**ホネクイハナムシ**のメスはクジラの骨にたどりつく、形を変えて潜り込み、二度と出ていくことはないそうです。そして、口や肛門はなく、骨の中のコラーゲンを溶かして栄養にするそうです。一方オスは、体長1ミリに満たないほど小さく、骨から栄養を取ることができないため、メスの体にくっついて、ひたすら子孫を残すそうです(笑) おもしろいですよね。



絵本を読んで一番驚いたのは、数十年生きたクジラが、死んだのち、なんとおよそ**100年ほど**も、深海の生き物たちのご馳走になっているということでした。そして、その体を食べた生き物たちが、新たな命を育み、つないでいく命の連鎖も担っていたのでした。

このように、豊富な情報量に深海の生物に興味湧き、こんな研究をする職業っておもしろいなーと思いました。またクジラの偉大さも感じました。

その反面、私たち人間は、生物界の頂点に立っているかのように勘違いして、多くの生き物を捕獲、乱獲して絶滅に追い込んだり、自然を破壊して「地球沸騰化」の時代をつくりだしてしまったり、いまだに人と人が争う戦争が絶えなかったりという現実も考えさせられました。自然界ではクジラに限らず、「死」から生まれる「多様な命」も身近には沢山あることに、思いを馳せながら、改めて地球の中の生き物たちの生の循環の尊さを気づかされた一冊でした。

かなり長文で私的な感想を書いてしまいましたが、この絵本は深海魚好きな方も、そうでない方も、気軽に楽しむことができるユーモアにあふれた一冊です。ぜひ一度手に取ってご覧になられてみてはいかがでしょうか。新たな世界に出会えるかもしれませんよ。



クジラがしんだら